

世界の文学

12

ブ
ラ
ン
シ
ョ
グ
ラ
ツ
ク

集英社版 世界の文学 ⑫ ブランシヨ

アミナダブ

シルトの岸辺

集英社

AMINADAB
by Maurice Blanchot
Copyright © 1942 Éditions Gallimard
Japanese translation rights arranged through the
Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

© 1978 Shueisha

集英社版世界の文学12

フランシヨ／グラック

一九七七年二月二〇日印刷

一九七八年一月二〇日発売

訳者 清水徹／安藤元雄

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三十一番一五

電話(〇三)二三九一三八一一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

電話 出版部(〇三)二三〇一六三六二

販売部(〇三)二三〇一六一七一

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

目次

アミナダブ

清水 徹訳

3

シルトの岸辺

安藤元雄訳

213

解説

清水徹／安藤元雄

467

著作年表

479

ア
ミ
ナ
ダ
ブ

夜はすっかり明けていた。それまではひとりきりで歩いてきたトマは、頑丈な身体つききの男がひとり、戸口の前を静かに掃除するのに余念がないのを眺めて、愉しい気持ちになった。その店の鉄のシャッターはなかなば上げられていた。トマがすこし身をかがめると、店の内部には、いろいろな家具がひしめきあうなかにやと残された場所のすべてを占領しているようなベッドに、ひとりの女が寝ているのが見えた。女の顔は壁のほうを向いていたが、すっかり隠れてしまっているわけではなかった。穏やかで、しかも熱っぽそうな、苦しげだが、といてすでに安らかな眠りに身を任せているような、——女の顔はそんなふうだった。トマは身を起した。あとはただ、そのまま道をつづけさえすればよかつたのだが、掃除をしていた男がかれに声をかけた。

「お入りなさい」腕を戸口のほうに伸ばしながら男はこういって、進むべき道を示した。

それはトマが考えてもみなかつたことだった。しかしか

れは、これほど権威ありげに語りかけてくる男をもっとよく見ようとして、近づいていった。身なりがとくにかれの眼を惹きつけた。黒のモーニング、グレイの縞ズボン、白いワイシャツ、袴とカフスはすこし贅になつてゐる、——服装のどの部分も、しげしげと眺めるにふさわしいものであつた。トマはそうした細部に興味をそそられて、そばにもっと長くいられるようにと、男のほうに握手の手を差しだした。それは正確にはかれのやろうと思つていた動作ではなかつた、かれはいつでも、他人から遠ざかり、ある程度以上密接な関係は結ばずにおこうと考へていたからである。男はおそらくそれに気がついたのでらう。伸ばされた手を見つめ、なにか曖昧な儀礼的なしぐさで答へてから、また掃除をはじめ、こんどは周囲のものごとをおよそ無視してゐた。

トマはかつとした。こんどは向いの家が眠りから覚め、錠戸が音をたて、窓が開かれた。小部屋がいくつも見えたが、寝室と台所に当てられた部屋らしく、乱雑で、あまり清潔とはいへなかつた。眼前の店舗のほうがはるかに整然と片づいてゐるように思へ、いかにも気持よく休息できそう、気を惹かれ、好ましかつた。トマは入口のほうにまっすぐに歩いていった。左右を眺めていたが、そのうちかれの視線は、それまでは注意を惹かなかつたショーウィンドウのなかのある品物の上に停つた。それは芸術的価値はたいしてない一枚の肖像画で、肖像の描かれたカンヴァス

上には、他の絵の消し残りの部分がまだ見えるような代物だった。拙劣な顔の絵は、なれば破壊された都市のいろいろな大建造物の背後に消えかかっていた。緑の芝生の上に立つ一本のひよろ長い樹が、その絵のなかでもっともすぐれた部分だったが、残念なことにその樹が、顔の絵を完全にかき乱していた。どうやら、ありふれた顔立ちの、ひげのない男が傲慢な微笑を浮べている顔らしい。たえず途絶えている目鼻立ちの線を延長して想像してみるかぎりでは、すくなくともそんな顔に思えた。トマは辛抱よくその絵を検討した。何軒かのとても高い家のあることが見分けがついたが、それらの家々にはたくさんの小さな窓が、無造作に、均齊を欠いたままならば、いくつかの窓には灯りがついていた。また遠景には橋がひとつ、川がひとつ、そしてこれはまったく茫漠となつてはいるのだが、山並へと至る道が一本あるらしかった。心のなかでかれは、いま到着したばかりのこの村と、たがいの上へ上へと重なり合うように建てられているため、全体としてはいわばひとつにまとまって、道行くひととはただのひとりもない地方にただひとつそそり立つ巨大で荘嚴な建造物のようになってはいるこれらの小さな家々をくらべてみた。やがてかれはそこから眼をはなした。通りの向う側で、人影が窓のひとつに近づいた。あまりよく見えなかったが、ずっと明るい玄関に面しているにちがいない扉が押し開けられ、そこから流れこんだ光が、カーテンのうしろに立つ一組の若い男女の姿を

照らしだした。トマはかれらをおぼえずと眺めた。青年のほうは自分が見られていると考えて、進み出て窓の手摺に腕をついた。村に着いたばかりの男を眺めるその態度は、まったく無邪気さそのものだった。若々しい顔をしていたが、頭部には包帯を巻いてあって髪はかくれ、そのためどこか病身な感じが漂い、それを若さがもてあそんでいるふうだった。微笑を浮べたそのまなざしで、かれは、悲観的な考えをほのめかすものの一切を吹き散らし、かれの前にだれが立とうと、赦免も処罰も伝わってこないように思えた。トマはその場に身動きもしなかった。眼に映るものの安らいだ性質を味わうあまり、それ以外の計画はすべて忘れてしまうほどだった。といって、微笑だけでは満足できず、かれはまた他のなにかを待っていた。若い女のほうは、まるでこの期待を悟ったかのように、片方の手で招くような合図を小さくして、それからすぐさま窓を閉めた。すると部屋は急にまた暗がりにもどった。

トマはひどく当惑した。あの動作をほんとうに呼び招いているのだと考えていいのだろうか？ あれは勧誘というよりもむしろ友愛のしるしだ。お引き取りを願うしぐさというふうなものでもある。かれはためらったままその場に立ちすくんだ。はじめの店のほうを眺めると、掃除を引受けていた男も、もはや家のなかに入ってしまった。それが最初の計画をかれに思い起させた。しかし、いままぐ実行しなくても、いつでも時間はあるはずだと考えて、か

それは通りを渡って向いの家に入ろうと決意した。

なかに入ると長くひろびろとした廊下だったが、驚いたことに階段がすぐには見当らなかつた。かれの計算によると、めざす部屋は四階か、いやたぶんそのもう一階上にあるはずで、かれはできるだけ早く昇つてその部屋に近づこうと気持をはやらせていた。廊下は果てしないように思えた。いそいだ足どりで廊下の端まで歩いてから、さらにぐるりと一まわりした。ついで出発点にもどつて、こんどは歩き方をのろくし、仕切り壁にへばりつくようにしてその凹凸のひとつひとつに従いながら、またはじめた。二回目の試みも最初の試み同様に成功しなかつた。だがかれは、最初の探索のときから、ある扉に分厚いカーテンがかかっている、その扉の上に粗雑な字体で、入口はここです、と書いてあるのを眼にとめていた。とすれば入口はそこだ。トマはそこにもどつて、うっかりとたいして気にも留めなかつたことを悔やみながら、固い樫の木でできて、いかなる攻撃にもびくともしないだろうと思えるほど厚い、ずっしりとした扉が、鉄の蝶番に重々しくはまっているのを、苦しくなるほど注意力を集中して見つめた。それは細工の巧みな建具で、きわめて細かな彫刻で美しく飾られていたが、どこか荒々しく雑な様子も見せていたので、かりにそれがどこかの地下室の扉で、その出口を隙間もなく閉ざしているのもあつたら、おそらくじつにしっかりと見えたことだろう。トマは錠前を見ようと近寄つた。かれは錠前

の舌を動かそうと試みたが、見ると石のなかにふかく挿しこんだ一本の木片だけで扉を滑り溝のなかに支えてあるだけであつた。ほんのすこし押すだけで扉を動かすことができるだろう。それでもかれは決断を下さぬままだつた。なかに入るなどたいしたことではない、かれは好きなときに外に出てこられるという可能性も保っておきたいと望んだのだ。辛抱よくしばらく待っていると、はげしい喧嘩がだしぬけに仕切り壁の向う側ではじまつたような騒がしい物音に、かれは驚いた。かれの判断しえたかぎりでは、その事件は、通りより低く掘つてつくられた、あのぞつとするほど不潔な一階の部屋のうちのどこか一室で起つたものだった。騒ぎにかれはまず気兼ねした。叫び声が不愉快に反響して聞えてくるからであつたが、といつて、いったいどうやってそれほど大きくかれの耳に届いてくるのか、つきとめることはできなかつた。これほどしわがれて、しかも同時に甲高く、また押し殺したような叫び声を、かつて耳にした記憶はなかつた。まるで、ひどい呪詛の言葉でも投げつけぬかぎりは破壊できそうもないほど和合と友愛とにみちみちた雰囲気のなかで、喧嘩が爆発したとでもいうふうだつた。

はじめトマは、そんな情景を目撃するのはいやだつた。かれは周囲を眺め、その場から離れたいと考へた。しかし、いっこう弱まらずにつづく叫び声にかれの耳がしだいに慣れていったので、もはやその場を立ち去るには遅すぎると

かれは思った。そこでかれのほうで声を張りあげて、入っ
ていいだろうかと騒々しいなかをたずねた。答えはなかつ
たが、騒がしきはびたりと静まり、その奇怪な沈黙のなか
には、不平と怒りが騒がしかったとき以上にありありと表
現されていた。きつと自分の声が聞えたのだと確信したか
れは、いまの呼びかけがさてこれからどう受け入れられる
だろうかと考えた。食糧をたずさえていたので、空腹では
なかったのだが、元氣をつけるためにすこし食べた。食べ
終るとすぐに、かれは外套を脱いで畳み、それを枕がわり
に使って頭の下に当てて、身体を床に伸ばした。まもなく
眼が閉じた。およそ眠りたくなどなかったのだが、静かな
感覚のなかに氣持を休めると、それが眠りのかわりとなつ
てかれをその場から遠くへと連れ去った。同じ静けさが外
にもひろがっていた。それがきわめて確乎とした、尊大な
までの静寂であつたので、かれは、自分の休息のことしか
氣にかけないのは愚かな態度だつたと思ひこんだほどだつ
た。なぜ、なにもしないで、じつとここにいるのだろう、
なぜ、絶対に訪れぬ救いを待ちうけているのだろう？ か
れはつよい郷愁に似た思ひを感じた、が、やがて疲労感が
他を圧して、かれは眠りに落ちこんだ。

眼が覚めるとなにも変つてなかつた。かれは片腕をつい
て身体をなかば起し、しばらく耳を澄ませた。沈黙は不愉
快ではなかつた。敵意を含んでもいなければ、異常な沈黙
でもないのだが、ただ突き破られることを許さない、それ

だけのものだつた。トマは、家の内部では依然としてかれ
のことを忘れつづけていることを見とつて、二度目の眠り
を求めた。だが、疲れていたのに、なかなか眠りを見つけ
ることができない。束の間うとうととまどろんだかと思つ
と、果してこれが眠りだろうかと考えて、たちまち眼が覚
めてしまふ。そう、それは眞の眠りではない。一休みして
いるあいだ不安の種子は見えなくなつてはいるものの、じ
つはいつそう憂鬱に、いつそう不安になつてはいる、——そ
んな休息だつたのだ。かれはひどく疲労してしまつたので、
ふたたび眼が覚めたとき戸口のところで髪をもしゃもしゃ
にした濁つた眼つきの男がかれを待つてゐるのを認めても、
べつに嬉しくもなかつた。不愉快な驚きに襲われたほどだ
つた。「おや、この男は言いつけられてぼくのところへき
たのかな？」それでもかれは立ちあがり、外套の埃を振り
払い、そんなことをしても無駄なのに皺を伸ばそうと試み
た。そうやってゆつくりと手間をかけてから、なかに入ろ
うとするそぶりを見せた。守衛のほうはかれが数歩あるい
てもそのまま、すぐそばまできて、いまにもかれをすこ
し押しつけてそのまま先へ進もうとしているのを見て、は
じめてその企図を理解しようだつた。そこで守衛はおず
おずとトマの腕に手をかけた。どちらがだれだか解らなく
なるほどかれらはたがいひどく近寄つていた。トマのは
うが背が高かつた。近くから見ると守衛はさらに虚弱で不
幸なようだつた。眼は震えていた。服にはつきが当ててあ

り、繕い方は上手で全体としては清潔ではあったが、困窮と孤独の不快な雰囲気は漂っていた。そのぼろを制服と想うことはできなかった。

トマがそつと身をふりほぐくと、べつに抵抗には出会わなかった。扉はなかば開いているにすぎず、その開いたところをおして、階段がもつと暗い場所へと降りてゆく、そのはじめの数段が見えた。一段、二段、三段と、そこまではどうやら見とおせたが、そのさきへはもう光は届いてなかった。トマはポケットから貨幣を二、三枚取りだして、これを差しだせばなかに入れてくれるだろうかと相手の様子を盗み見ながら、その貨幣をもう一方の手に移した。守衛の頭のなかを解釈するのはむずかしい。「話しかけるべきだろうか？」とトマは思った。だが、かれが口を開かぬうちに、しかもかれのほうではまだ愛想のいい動作をわずかにしてみただけに、相手はさつと手を伸ばし、貨幣は上着のただひとつつぎの当てないポケット、色褪せた金モールで縁取られた縦も横もとても長いポケットに投げ入れられた。トマは一瞬驚いたが、そのことを悪くは解さなかった。かれは急いで扉の掛金を探し、扉を押し開けようとした。守衛はかれの前に立っていた。かれの態度はどうかしら変っていた。どんな点か？ それは簡単には見抜けなかった。あいかわらず憐れな、いやおずおずさえてしている様子である。不安げだったかれの気持は苦惱へと変わったように、その眼は恐怖の光を浮べて輝いていた。それで

もかれはトマの道をふさいでいた。権威もなく確信もなくそうしているのだが、戸の框にかなりしつかりとしがみついているので、通りぬけるにはいまや力を使わねばならなかった。「不愉快なやつだ」とトマは考えた。いったいなぜこんなふうに態度を変えたのだろうか？ まるで、守衛のほうには、いまのいままではなにも守る必要はなかったのに、トマがかれの歡心を買うことで、かれの新しい義務をつくってしまったともいうふうだった。

この新たな障害もやがてしかるべき大きさと縮んでいった。男はあいかわらず同じへりくだった態度を見せているが、たぶんかれは、ふたりでいっしょに進んでゆくことになる道に、自分が先に足を踏み入れようと思っただけ思っているのだろう。トマのひとことが事態を解決した。

「あれが四階に行く階段ですか？」

守衛は考えこんでから、どっちつかずのしぐさで答え、それからうしろを向いて扉を押し開け、階段の第一段に足をかけた。トマはこの動作にひどく好奇心をそそられた。

なにを意味するのか、どうもあまりはつきりしない。この門番はまったくいわゆる門番そのものだ。こいつ、この建物のことはまるつきり知らない、案内などこれっぽかりもできないと白状したがっているのか？ 責任を回避しようとしているのか？ それとも、じつに詳しく知っているのか、いろいろと湧きあがってくる想念を、冷淡と疑惑のしぐさで追い払うのが精いっぱいなのか？ トマは、自分の

なすべき第一のこと、いま自分のなすべき唯一のことは、手遅れにならぬうちにこの同伴者に話をさせることだと判断した。かれが呼びかけると、相手はもどってきた。またかれを観察してみた。こんなに憐れでみじめな人間からなにが期待できるというのだろうか？　かれは自分の孤独をひしひしと感じ、自分にはなにものもないのだというはげしい不安に胸を締めつけられた。

「あんたが門番ですか？」かれは男にたずねた。

男はうなずいた。それだけだった。この返答にはなにひとつ欠けていなかったが、しかもそれはなにも語っていないかった。

守衛がほとんど頼りにならぬことを見て、かれは一步退いた。すると自分が扉をすく背にしているのに気がついた。意外なことがあった。扉の様子はじめ見たときとちがっていたのである。木材のなかに刻みこまれていたように見えた彫刻や模様は、じつはとて長い釘の頭をならべてつくりだされたもので、その釘の尖端が危険にも扉の反対側のほうに数インチも突き出していた。廊下に向かったほうの面ではむしろ快い模様であった。その模様はすぐには見えなかった。まなざしがなにかを発見しようとする欲することをやめて辛抱よく待ちうけ、イメージが形成されてくるのを、ほとんど力づくで受けとらねばならなかった。トマは釘の突き出ているほうの面も見つめた。釘の尖端や屑鉄が錯綜しているそのなかに、なにか秩序があるのだから

うか？　かれは扉の表面を長いあいだじっと見つめた。だが、指物師はこの細工の裏側のことはいいかげんにしてしまつたにちがいない、いっさいの配列は偶然によって支配されていた。それでも、すくなくとも一箇所だけは職人の考えを示していた。掛金の上に小さな覗き窓がつくられていて、その開きの部分は強い赤の色に塗られ、ねじれて不釣り合いな大きさの蝶番で止められて、分厚い木材のなかにもぐりこんでいるように見えたのである。その覗き窓の開きの部分をなしている金属板にはごく最近ペンキを塗り重ねてあって、老朽し陰鬱な扉全体のなかでそこだけがくつきりと輝いていた。まるで、その開口部のところまで身をかめようという気持ちになっているひとに対しては、新しい感覚がそこで待ちうけているかというふうに見えた。トマはどういうぐあいになっているのか見定めようとした。かれは鉄板を木の枠から離してもちあげようと試みたが、頑として動かない。外から開ける覗き窓で、扉を押さずに外側から家のなかを見ようとする訪問客のためのものだったのだ。もうひとつ奇妙な点があった。覗き窓を開けると、扉に門がかかつてしまうのだ。つまり、金属製の門が溝のさきまで滑っていつて、鉄製のふたつの鉤型の受け具の下をとおりで、それで門は固定されるのだった。だから、家のなかを見ようとする、一時はなかに入るのを諦めねばならぬというふうになつていたのである。こうした細部はもはやトマにとってはあまり関心を惹くものではなかった

が、かれは長いあいだそこに足を停めた。かれはできるものならあとでもどりしたかった、この小さな覗き窓ごしに階段とこの暗い玄関——これから入ってゆくことになる玄関——とをひとわたり眺めることができたらと思った。そんなふうにしたらくさんの物が見抜けただろうとかれには思えたのだ。だがいまやそれも遅すぎた、かれは前へ進まねばならなかったのだ。階段そのものはほとんど気に入らなかつた。一段一段が洗ってあり、石が磨り減つてところどころ深く凹んでいたが、新しい階段に見えるほど光っていた。かなりひろく幅を取って両側に壁が立ち、そのあいだに階段が、滑稽なほど狭い通り道としてしつらえられていた。この道はとても短かつた、六段か、たぶん十段くらい、というのには、階段の終りのほうは暗闇のなかに消えていて、階段がまた新たな玄関へと通じているのか、それで終っているのか見分けがつかなかつたからである。トマは激しい関心を燃えあがらせて目標のほうへ足を踏みだしたので、守衛の呼ぶ声もすぐには聞えず、階段の二段目になつてやっと足を停めたほどだつた。とはいへ、それは特徴のある声だつた。重々しく悲しげな響があつて、そのため、その語ることのすべてが真実だとは信じられないような声だつた。まさしくこうした声をしているからこそ、この男は守衛という役を果すようにえらばれたにちがひなかつた。トマは動かさずに守衛の声を聞いていた。守衛は言葉を繰り返さねばならなかつた。こんどはもうはじめほど優

しい声ではなかつた。

「どこへ行くんですか？」かれはたずねていた。「だれかに会いに行かれるんですか？」

トマは答えなかつた。このように訊問されてもべつに意外ではなく、むしろかれとしては、自分が無視されてはいないということを確認して安心したのだが、それでもかれは心苦しい感じがした。実際、かれはどこへ行こうとしているのだろうか？ いまここにいるということ、どうやったら説明できよう？ かれは仕切り壁を見つめた。まさしく深い溝ともいえるもので、かれはその壁から引き離されている。かれはそこにいる、それ以上のことはなにもいへなかつた。

「なぜぼくに質問するのですか？」かれはたずねた。「この建物のなかを行ったり来たりしてはいけないんですか？」門番は驚いて顔をあげた。まだ若い男だつた。その若さのなかには、偉大と衰弱の、生と苛酷な終末の説明しがたい反映があつた、なにかしらひとに無理やり別の世界を考えさせるような、だが別の世界といつてもこの世よりも劣つた、みじめな世界を考えさせるようなところがあつた。

「もちろんだれでも、理由があれば入れますよ」かれは重々しい声で答えた。「部屋を借りているひとなら好きなことをしていいし、いちいち報告する必要はありません、もちろん規則は守っていただきますが」

トマは勢いよく言い返した。

かれはそれらがみな同じ絵だと考えてしまったことだろう。奇妙なことだ。かれはそれらがなにを表現しているかを理解しようとして努力した。そして、無用の飾りを——とくに画家がやたらに描きちらしてあるアカンサス葉飾りを——無視してみると、あまりにも注意深く描きこまれた線や画像の無秩序のなかに、家具を並べ独特な飾りつけをした部屋の形を見つけた。絵はそれぞれひとつの部屋か住居を表現しているのだ。制作者の素材さは、ときに、ある物体を直接描くかわりに、大まかで漠然とした象徴物をそこに置いていた。夜になれば輝く電燈のかわりに太陽があったり、窓はないが、窓から見える通りや向いの建物や、さらにそのさきの広場の樹々などが、すべて、仕切り壁の上に忠実に描いてあったりするのだ。嫌悪感が若干の形態をそのありのままの形で示すことを画家に禁じていたのだが、それゆえに、どの絵でもベッドや長椅子のかわりに、椅子を三つ並べてその上にマットレスを置くというように間に合わせの設備か、念入りに入口を閉ざした寝室かのどちらかが描かれてあった。

トマはこうした細部を辛抱づよく見つめた。それらはすべて、なんと子供じみていることか。

「おやおや、ここの部屋がお気に召したようですね」守衛はいった。「それなら、お望みのをすぐにお選びください」

とすると、絵に描いてあるのはこの家の部屋なのだ。ト

マはいまや絵の意味が解ったので、儀礼的に、まえよりいっそう楽しみながら画像を検討するふりをした。しかし、かれの好奇心が無価値な細部にばかり向けられているので、実情をかれ以上に知っているひとには愚かで耐えがたいものに見えたのか、あるいは、敬服に値する部分に感心するのを怠っているその怠慢ぶりから、この問題にまじめにかかずらおうとする関心のすくなさを見抜かれてしまったのか、とにかくかれの善意も守衛に満足感をあたえなかつたらしく、守衛は絵の何枚かに近寄って、それをだしぬけに壁のほうに裏返してしまった。トマは啞然としてくやしがつつと仔細に観察してみたかた絵にはかならなかつたのである。

「どうもすこし急がせすぎますね」

そしてかれは、見るのを禁じられた絵を指さしながらこう言い添えた。

「まだあの部屋のうちのどれかひとつを選んでの諦めたわけじゃないんですよ」

ことはこれだけではすまなかつた。トマは、あまりにも重々しく勿体のつけられてる事柄のすべてを、気軽に取り扱ってやるうとでもいふふうで、それらの絵のうちの一枚を自分でもとにもどそうと思ったが、そうしないうちに守衛は素早い動作でかれの手を押しとどめ、「それは貸してあります」と叫んだ。絵のことなのか、絵に描いてある

住居のことなのか？ 目下のところその疑問を解くことはできず、トマとしてはうしろに跳びさがって手荒な衝撃をかかずゆとりしかなかった。不意をつかれ、いそいで身体を動かし、異様な感情に犯されたため、かれはべつに注意もせずにとある大きな脇掛椅子に腰をおろすと、かれの身体はまったく気持よくそこに沈みこんだ。脇掛に両手を置き、上体はまっすぐに、両脚はしかるべきところに置いて、かれはまるで裁判長にでもなったような感じで、それまではあずかり知らなかった権威が突然身に備わったかのように思えた。守衛にしてもまるで許しを乞うかのようにおずおずと近づいて、上体をかがめ、かれの前数歩のところにと停つて、この威厳ある客から身分相応に扱ってもらふ権利を受けようとしていた。トマはかれに氣のない視線を投げかけた。「わたしにはこんな部下は必要じゃない」とかれは考えた。守衛はどうとう背を向けて歩きだし、途中で金モールの帽子を取りあげて頭にかぶり、白木の小戸欄を開けて、なから、白いカードを表に貼りつけたノートを取りだした。「これははつきりしている」かれは思った。「名前を書きこめばそれですべてけりがつく」守衛はノートを開き——どのページもみんな真つ白だった——、だれにもましてかれこそが、そこにはなにも書いてないということをよく知っているはずなのに、ゆっくりとノートをめくっていった。ときどき、とあるページで停つては、現実には書かれていない文字の行を指でたどる、あるいはすでに読

んだページにもどつて、そのページのおかげで意味のはつきりした箇所あるいはそのページと矛盾する箇所とくらべる。はじめのうちトマは、こうしたお芝居に自分が欺だまされていると相手が信じるならそれもよい、お芝居にけりをつけることなどなにもしないでおこうと企図した。こうしたすべてはまさににお芝居ではなからうか？ そこでかれは身じろぎもせず、ゆったりと腰を据えていた。かれがつぎのようにいったのは、たんに儀礼的なことにすぎない。かれはこの言葉をいま眼前にいる話し相手にではなく、できるものなら知合いになりたいと思つた他の人びとに宛てて語つたのである。

「必要なだけいくらでも待つてますよ」

しかし待つたのはひどく短いあいだだった。まもなくこの小部屋はひどく快適さが薄れたように思え、空気の欠乏、あいた空間のなさ、まわりじゅうに近々とそそり立つ壁からくる息苦しい印象が、こざれいとはいえないささか狭すぎることの部屋に感じられた魅力を、たちまち奪い去ってしまったのである。トマは上着のボタンをはずさざるをえなかった。カラーをはずした。脇掛椅子に坐つたまま思はず身体がよろめき、威厳をすこしでも保とうと努力をしたが、崩れるように憐れな姿勢になつてしまった。

守衛はいそいで駆け寄つてかれを助けようとしたが、身のこなしがひどくぶざまだったので、かれが倒れるのを防ごうとして自分も平衡を失い、かれにしがみつき、かれを